

平成二十八年一月二十四日

手の届く棚に物置く寒の入り 幸  
鑑賞・暖冬から厳冬への急変である。炬燵に入ったら一歩たりとも出たくない。同感である。ただし、「物置く」は「もの置く」としたい。

鍋焼にふるへる卵いつ崩そ 朋子  
鑑賞・鍋焼に生卵を落とした。卵の硬さ加減は人の好みによる。卵を崩すタイミングである。強調の終助詞「そ」の使用によって、緊張した気持ちだが、うまく詠み込まれている。

ひびの手の戦後の育児母伏せり 友子  
鑑賞・使い捨ての紙おむつが普及していない時代、襁褓は洗って再使用していた。手の皸割れは育児の負担を増した。この苦勞を知っているのは、六十以上の戦後世代であろうか。この句は、「輝の戦後育児や手を伏せり」とすることもできる。育児の母は理解できる。母を出したのであれば、「母臥せり」となるろう。

饒舌なロボット欲しき小正月 明美  
鑑賞・介護ロボットの試作が公開される時代である。少しお喋りな話相手が欲しい小正月である。

元旦や希望日記に書ききれず 邦子  
鑑賞・読み方によっては、「希望日記」なるものがあるようだ。評者はあって欲しいと思う。この句は、「元旦の希望日記に溢れをり」とすることもできる。

羊羹の端も美味なり女正月 ツル子  
鑑賞・羊羹の端を美味とするのは、熟達した主婦の心の余裕である。「端も美味」ではなく「端の美味」にした方が良い。

冬帝の明日来る予報豆を煮る 才美  
鑑賞・冬の神様に煮豆を献上するようで面白い。「予報」は表現が硬いので、「筈よ」とすることもできる。

綾取りに絡みしこころ雪しんと 才美  
鑑賞・綾取にからめた心理描写である。「雪しんと」は「夜の雪」とすることもできる。

頼りきる母いとほしや福寿草 友子  
鑑賞・母の介護に明け暮れる作者の心情が良く出ている。原則として、「嬉しい」とか「悲しい」といった作者の心情をダイレクトに表現する言葉は、避けるべきとされている。しかし、作者は「いとほしい」という言葉を使わざるを得なかったであろう。

五日はや家財積まるる車かな 明美  
鑑賞・正月早々に引越すなど普通、考えられないが、現実にはあった。人の世はまさに様々である。出会い頭の出来事を素早く切り取った。

着ぶくれて物干す先の昼の月 弘子  
添削・着膨れてもの干しにけり昼の月

人日や釣堀に買ふ畑のもの 朋子  
鑑賞・意外性を狙った句である。人日に釣り堀にこもれる人が羨ましい。そばに野菜の無人販売スタンドでもあるのであろう。

朝市の大根持ち替へ坂の町

弘子

初仕事年始廻りの光る靴

かおる

鑑賞・大根の重量感を感じる。朝市ですつしりした大根を衝動的に買い求め、後で持ち運びに難渋している。「持ち替へ」が良い。

大海を背の演奏や水仙花

ヤエ子

七草のなすな一種の粥をふく ツル子

鑑賞・たとえ「一種」であっても、この日の朝は粥を食べる、としたのが良い。スー

添削・演奏の背の海原や水仙花

パーマーケットの七草セットに安易に頼らない姿勢。

初雪や団子屋の湯気もうもうと

友子

介護にも笑ふ日多し去年今年 友子

吹きたまる落葉の中の猫薄目

ヤエ子

鑑賞・落葉の吹き溜まりに入り込んでいる猫の姿が目に見えぬ。薄目が効いている。

鑑賞・介護に追われる毎日。介護に漏れないように、平常心を保ち、細心の注意を払う作者。「介護にも」の言い切りには、はつとさせられる。

遊ぶ子のなき公園に雪積もる

眞壽

鑑賞・塾通いに追われている子供の事態を捉えている。「公園に」は「公園や」にする  
と良い。

箱根路のつなぐたすきの息白し ツル子

添削・箱根路へつなぐたすきや息白し

雪が舞ふ廊下に一人ランドセル 眞壽

帰りにも富士見ゆる坂寒日和

弘子

添削・富士見ゆる坂を戻りし寒日和

鑑賞・登校前の束の間、雪の降り込む廊下に遊んでいる子供。「雪が舞ふ」は「雪の舞ふ」にしたい。

元気なりまだまだやれる初仕事 眞壽

添削・元気なりまだまだやれる年初め

病む母へ丹精の梅香りけり 友子

寒空や米国狙ふ北の核

かおる

寒椿山門までの女坂

弘子

添削・牡蠣ならば口閉ざしをり北の国

添削・女坂山門脇の寒椿

旅支度初雪降つて夢となり

邦子

赤き実のふはりとありし枯野かな

添削・初雪に消されてゆきし旅の夢

かおる

鑑賞・枯野と赤き実との対比が良い。

当てはいらぬと鱒酒を干しにけり 朋子

添削・鱒酒や当ては要らぬと汲み交はず

飛石に雪ちらつくや小正月 朋子

添削 飛石に雪の残りし小正月

添削 初詣砂利踏む音の切りもなし

列島のモスク三百寒に入る 明美

母の年過ぎて十年初鏡 幸

添削 新年の祈りの中のモスクかな

添削 母逝きてたつた十年初鏡

暖房車上手にスマホ操る赤子 明美

雪の朝勇んで外へ喜々の我 幸

添削 赤子持つスマートフォンや暖房車

添削 雪の朝喜々と飛び出す老一人

初日の出大樹の梢に昇り行く ツル子

枯木立網目模様の枝の先 ヤエ子

添削 初日の出庭の大樹を越えにけり

添削 裸木や網目模様の影揺るる

嫁孫の自慢許すも松の内 幸

烈風を手玉に取りて雪しまく 才美

添削 許し置く孫の自慢や松の内

添削 身の内へ容れし烈風雪しまく

外つ国の雪まみれの娘笑みはじけ ヤエ子

善哉の汁のぐつぐつ小正月 明美

添削 雪知らぬ外つ国の人 はじけをり

添削 善哉の汁のたつぷり小正月

寒星やビー玉散らす兄の部屋 才美

モツレクや一一七の魂人へ かおる

添削 ビー玉を散らせし兄や寒の星

添削 巡り来る「レ」レクイエム

あたらしきプリンター 提げわが五日 朋子

朝風呂のかすかなゆらぎ初日さす ヤエ子

添削 手に軽きわが初買のプリンター

添削 朝風呂のゆらぎかすかに初日の出

中吉の身くじ引きをり初詣で ツル子

オムレツの湯気もほぼる雪来るか 才美

添削 今年また中吉の籤初詣

添削 オムレツを湯気もるとともに雪来るか

獲れたてがよちよち歩く松葉蟹 眞壽

アポロンか古稀のライダー冬の景

添削 よちよちと朝の光へ松葉蟹

かおる

みどり子の手を思はする福寿草 邦子

添削 寒暁の古希のライダー陽の中へ、または、

添削 みどり子の天させる指福寿草

アポロンの化身寒暁のバイク乗り

年毎に賀状少なくなりけり 眞壽

枝先の仄とくれなゐ春隣 弘子

添削 今年また賀状の数の減りにけり

添削 枝先のくれなゐ仄か春隣

粛粛と砂利の音のみ初詣 邦子

元旦やスタートライン希望満つ 邦子

添削：一歩づつ希望確かめ大旦

（不在投句 古野明美、藤本友子）

（文責 代表 増田 守）